

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	持続可能な利用のための伝統的技術の保存、新たな利用技術の開発
手法名	フットパス計画による景観の保安全管理
主体	東京農業大学
背景(地域の課題)	里地里山の保全と活用には、人手と継続的活動が必要不可欠である。地元住民だけではなく、地域外の住民にも里地里山の保全と活用の機会を提供し、身近な自然に触れ合いながら保全活動に関わってもらえる環境や仕組みづくりが求められている。
手法／方策の詳細	<p>近年、身近な里地里山を散歩する楽しみやそのための散策道作りの機運が高まっている。フットパス計画を基本として里地里山景観の保全と活用のための異なる分野と連携した誘導方策が考えられる。</p> <p>1)「道草を食う」という視点 よそ見ができるということが歩くことの長所。一本の道をずっと行くだけでなく「横にそれて楽しむ」という視点が道作りには大切。道草できるために、休憩所、展望台、集落の作業体験、草花、生き物、食べ物など、施設面とプログラム面の両面からの配置を検討することが必要。</p> <p>2)フットパス作りには一般の方の参加を 福島県鮫川村のフットパス作りの事例では専門業者だけでなく、参加可能なところには一般の方も積極的に関与している。道を利用する当事者が物を作ることが印象に残る良い効果をもたらす。専門業者と比べて素人製作のものは耐久性が不足しがちで毎年整備が必要となることが多いが、それが参加のきっかけとなる。利用者が道作りに継続的に関わることが大切である。(写真1)</p> <p>3)案内板について 案内板はあまり大きなものではなく、自動車から降りて見るような誘い出し効果があるようなものを考え、手作り感と統一感の両方に配慮する。例えば散策道の看板は継続的メンテナンスが必要な手作りのもの、車道沿いの案内板は公共性を持たせ比較的強度の高いものを採用するなど使い分けも必要。看板のオリジナリティと統一性を図るため、グッドデザインのロゴや統一された標識を検討することも必要である(写真2)。</p> <p>4)トレイルヘッド フットパスと合わせてレストラン、トイレ、宿泊所の配置を工夫し、駐車場から1～2時間ぐらいで帰ってくる経路から宿泊まで含めた経路まで様々なルート作りを考えておく(トレイルヘッド)。</p>
手法・技術的視点	里地里山での道作りは単なる移動手段だけではなく「道草を食う」という視点を取り入れた検討を行うことで一般利用者と関与できる仕組みが作り出せる。また道作りと連動して地域産業(地元の農産物や工芸品などのお土産物など)の活性化の可能性も広げることができる。



写真1 フットパスづくりの状況



写真2 案内看板

参考資料	里なび研修会in長野 東京農業大学講師 栗田和弥
------	--------------------------